

## 待降節から降誕節の期間を豊かに・・・

カトリック高槻・茨木教会 主任司祭

清川 泰司 神父

新型コロナウイルスの影響で、信徒の皆さんには、ミサ参加(ブロック分け)を制限しているために、毎週主日のミサに参加したくても、参加できない不自由を与えています。大変、申し訳ございません。

また、日ごろから「主日のミサ」に参加している方々には理解していただいておりますが、日本の教会で執り行われる日本語ミサの文言に若干の変更がありました(これまでの日本語の式文は暫定版であり、ようやくバチカンから認証された式文となった)。実施は、「待降節第一主日(11月27日)」からで、日本全国の教会で、変更した式文でミサが行われています。久しぶりにミサに参加される方は、困惑と、疎外感を持つでしょう。まずは、慣れていただくしかありません(ミサ式文のリーフレットを、主日のミサの折に教会で販売しております、ご購入ください=100円)。

「ミサ」自体、文言が変わっても、キリストの死と復活を思い起こし、御聖体によって「復活のいのち」に預かり、永遠に全人類の救いを諦めない「神の御心」との交わりに導かれることには変わりはありません。この式文の変更を機に、より深く「神の御心」を理解し、人生に、また世(生活の場)に生かしていただければと願っております。

「主のご降誕のミサ」は、全人類の救いを切に望む「神の御心」が「キリスト」として、また「幼子」として、神により地上に派遣されたことを記念します。そして、信者は、この「イエス・キリスト」が「神の御心」を語り、生き、それが人類に否まれ十字架の死に至り、人類の救いを諦めることの出来ない「神の御心」により「復活」したことを知っています。さらに、神の人類に対する愛の継続として、私たちはミサの中で「キリストの体」を頂き「神の御心」と繋がり、それに従い生きる道こそが、最高に命を生かす道であることを知っているのです。このミサは、この信仰の確信と、キリスト降誕によってもたらされた神の救いの業を、「聖霊」に満たされ、記念するのです。

また、1月1日は、「神の母聖母マリアの祭日のミサ」が行われます。「聖母マリア」は、「神の御心」を受け、その神の言葉の神秘の中で、「お言葉どおり、この身になりますように」(ルカ1:28)と、人間的計画(近視眼的救い)を捨て、神の人類救済の御心に全面的に希望をおき、キリストと共に生きました。その「聖母マリア」の希望こそが、カトリック信者の希望となるのです。この意味で、私たちは聖母マリアの信仰を模範とし、年の初めに、「神の母聖母マリアの祭日」のミサに預かり、「キリストの体」を受け、永遠なる「神の御心」が、「この身になる(体の復活、永遠の命)」という恵みを頂き、世(生活の場)に生かす者として派遣されるのです。

これらの考えの基礎は、「聖書全体が描く救いの歴史」、それ以降、現代に至っても、永遠に全人類を救おうとなさる「神」が、人類に「互いに愛し合いなさい」、「赦しなさい」、「敵を愛しなさい」、「最も小さい一人にしてくれたことは、わたしにしてくれたことだ」と、今も「聖霊」を通して御言葉を送り、御自分、また他者・万物との和解を促して下さっているという信仰にあります。

人類史において、人類は、全体の秩序を司る神の愛と正義を理解できず、自己の偏狭なる知恵に酔い、自己の都合で神のイメージを作り(偶像崇拜)、自己の未熟な正義を盾に他者、万物をはかり、神を、無視し、拒み、遠ざけ、どれほど悲劇を繰り返してきたことでしょうか。神は、世のはじめから、今も、人類の現実に痛みを感じ、人類の神を拒む特性を知り尽くしつつも、永遠に人類を諦めず、聖霊により言葉を送り、赦し、育むことを忘れません。私たち信者は、その「神の御心」を知るがゆえに、「主よ、憐れみたまえ」というのです。新しい式文では「主よ、いつくしみを」に変わりました。言葉は変わっても同じ意味を持つ願いなのです。私たちが、神に「いつくしみ」を願い、神は、私たちに「いつくしみ」を注ぎ、「キリストの体」を与え、その人を御自分のあたたかく(ルカ福音書15:11-32参照)、また広い心へと招く懐(御国・神の国・神の支配)に中で育もうとされるのです。

主のご降誕の神秘を味わう、この期間、この永遠なる神の愛を味わい、「神の御心」に生きる道に皆さんとともに導かれることを祈りつつ、ミサを捧げさせていただきます。